様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　22 日現在

機関番号：12601
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：23820017
研究課題名（和文）　ロシア帝国併合期の中央アジアにおけるタリーカの研究

研究課題名（英文）　Research on the *Tariqa* in Central Asia at the Time of its Annexation by the Russian Empire

研究代表者
河原　弥生（KAWAHARA YAYOI）
東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員
研究者番号：90533951

研究成果の概要（和文）：
本研究は、ロシア帝国併合期の中央アジアにおけるタリーカの活動に着目し、その発展過程や内部構造の解明によって、タリーカとムスリム地域社会との関わりを考察するものである。その結果、あるスーフィー一族に関する民間所蔵史料のテキストを出版し、それに基づいて一族の来歴や政権との関係樹立、経済的勢力拡大過程を明らかにしたほか、一族の一員が主導した「聖戦」から、彼らの地域社会に占めた位置について解明することができた。

研究成果の概要（英文）：
This research project, focused on the *tariqa*'s activities in Central Asia at the time of its annexation by the Russian Empire, seeks to examine the relations between the *tariqa* and the local Muslim community by elucidating the *tariqa*'s evolution and internal structure. As a result, the project has published documents from private archives related to a Sufi family, and based on these documents has not only clarified the family's origin, establishment of their relationship with the government, and the process of the development of their economic power, but also succeeded in exploring the status and role of the *tariqa* in the local community by studying the "holy war" led by a member of this family.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：東洋史
キーワード：中央アジア、タリーカ、スーフィー教団、マザール、ロシア帝国

１．研究開始当初の背景

中央アジア史上、特にティムール朝期において、ナクシュバンディー教団をはじめとするタリーカの指導者たちが政権の中枢部で宗教面のみならず、政治、経済などの面でも重要な位置を占めたことは比較的よく研究されてきた。しかし、東トルキスタンが清朝の支配に下り、西トルキスタンにおいてはウズベク三ハーン国が鼎立した 18-19 世紀に、各地で多様な民族集団が移住・定着し、各政

権が政治的統合と社会的秩序をもたらして、中央アジアの現在の姿につながるムスリム地域社会が形成された過程においても、タリーカとその指導者の役割は最も注目すべきファクターであり続けた。また、19 世紀後半以降、ロシア帝国が西トルキスタンを征服した後においては、タリーカは、異教徒の支配に対する「聖戦」の中心的存在であった。さらに、ソ連崩壊後の現在の中央アジアのイスラーム復興の現象の一つとしてもタリーカの再興が見られるなど、このテーマは極めて現代的な問題とも密接に絡んでいる。にもかかわらず、このテーマは、旧ソ連と中国の政治的イデオロギーの制約や現地語原典史料の研究の乏しさにより、長らく最も研究の立ち遅れた分野であった。

ソ連の崩壊後、中央アジア独立諸国では自国史の見直しが始まり、イスラーム研究を取り巻く環境も一変した。近年では、中央アジア内外の研究者によって、18-19 世紀におけるナクシュバンディー教団の変容が検討され、当時インドで興隆していたムジャッディディーヤと呼ばれる改革派の教義が同教団の本拠地であるブハラ・アミール国に流入したことが解明され（キューゲルゲン「18-19 世紀初頭の中央アジアにおけるナクシュバンディーヤ・ムジャッディディーヤの発展」『ロシアと中央アジアにおけるイスラーム文化』2 巻、ベルリン、1998 年所収）、また、コーカンド・ハーン国期のイスラームを、ウズベク部族による政権とその政治との関係性から論じた研究が現れるなど（ババジャノフ著『コーカンド・ハーン国：政権、政治、宗教』NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点・ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所、東京・タシュケント、2010 年（ロシア語））、中央アジアのイスラーム史研究、とりわけタリーカ研究は新たな段階に入った。

さらに、近年は中央アジア現地での調査・研究も可能となり、史料の公刊の面でも飛躍的な発展が見られる。例えば、私も分担者として参加したいくつかのプロジェクトでは、フェルガナ盆地と新疆において、現地の研究者も交えて組織的なマザール（イスラーム聖者廟）の調査と民間所蔵史料の収集が行われた。その結果、特にフェルガナ盆地に関しては、タリーカに由来するマザールについてかなりの程度全体像が明らかとなったほか、系譜書、教団の修行修了を認める免許状、タリーカ系譜図、弟子のリスト、聖者伝などの貴重な教団内部の史料が発見された。民間所蔵史料の収集の際には、所蔵者から聞き取り調査を行っているため、収集史料の史料価値が高まっただけでなく、その内容を補完する重要な情報も得られた。マザール調査の成果は『中央アジアのイスラーム聖地：フェルガナ盆地とカシュガル地方』シルクロード学研究 28 号、2007 年として出版され、私も論文「クタイバ・イブン・ムスリム廟-口承伝説と所蔵文書の検討-」を寄稿した。また、発見史料は、菅原純・河原弥生編『新疆およびフェルガナのマザール文書（影印）』第 1 集、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2006 年、154 頁、アシルベク・ムミノフ、ナーディルベク・アブドゥルアハトフ、河原弥生編『新疆およびフェルガナのマザール文書（影印）』第 3 集、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2007 年、vi＋236 頁など全 3 集の影印本として公刊された。

私は、これらの新発見の民間所蔵史料を活用して、フェルガナ盆地で活動したナクシュバンディー教団の一派であるマフドゥームザーダに関する研究に力を入れてきた。河原弥生「19 世紀コーカンド・ハーン国におけるマルギランの「聖裔」」『イスラム世界』2010 年 1 号（4 号）、121-139 頁（ロシア語）および河原弥生「コーカンド・ハーン国におけるマルギランのトラたち-ナクシュバンディー教団系の聖者一族に関する一考察」『日本中東学会年報』20-2 号、2005 年、269-294 頁では、これまで東トルキスタン史の枠組みの中でのみ捉えられてきたマフドゥームザーダの一派である、いわゆる「カシュガル・ホージャ家」のメンバーが、17 世紀末に東トルキスタンで政治生命を断たれた後、18 世紀のうちにフェルガナ盆地に活動の場を移して勢力を拡大し、19 世紀にはコーカンド・ハーン国政権にも参画する集団になっていったことを明らかにし、彼らの活動が、東西トルキスタンにまたがる広域的なものであり、より広い視座で論じる必要性を指摘した。また、新発見史料の一つである聖者伝を校訂、翻訳するとともに、これを用いて、上述の一族とは別の「カシュガル・ホージャ家」の一員がコーカンド・ハーン国勃興前のフェルガナ盆地で布教活動を行って、当時中央アジア・ムスリム社会を脅かしていたジュンガル勢力に対する反抗を試み、結果的に地域社会の統合を促した可能性を指摘した（「『ホージャ・ハサン・サーヒブキラーン伝』-フェルガナ盆地における民間所蔵史料の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』71 号、2006 年、205-257 頁および河原弥生「アーファーク・ホージャの息子ホージャ・ハサンの系譜書に関して」『東洋学』12 号、2004 年、98-103 頁（ウズベク語））。この他、継続的な現地調査で収集した民間所蔵の免許状の比較検討により、コーカンド・ハーン国期のフェルガナ盆地におけるムジャッディディーヤの活動の展開を解明した（河原弥生「コーカンド・ハーン国期フェルガナ盆地におけるムジャッディディーヤの発展」『内陸アジア史研究』25 号、2010 年、31-54 頁）。

このように、中央アジアのタリーカ研究は、学界全体においても私自身の研究においても、マフドゥームザーダおよびムジャッディディーヤの活動やマザールとの関係に関して近年急速に進展しつつあるものの、未だ地域社会においてタリーカが果たした役割を包括的に捉えるには至っていない。中央アジアにおけるイスラームの特質を歴史的に理解する上でも、当該時期の地域社会の変容や、ムジャッディディーヤの興隆に見られるようなイスラーム世界全体における改革の潮流を考慮しつつ、タリーカと政権や地域社会との関係の全体像を示すことが急務である。

２．研究の目的

中央アジアにおけるタリーカの活動の分析において最も興味深いのは、なぜ各地の歴代政権においてタリーカの指導者が大きな役割を担い、政権が政治力を失う局面においてはタリーカが「聖戦」を主導する原動力になり得たのかという問題であろう。本研究では、既知の年代記等と、現地調査によって発見される聖者伝や多種の文書史料、文書館での史料調査によって収集されるロシア帝国当局の行政文書を総合的に検討して、ロシア帝国併合期におけるタリーカの指導者たちの活動の全体像を描き出すことを目指す。

本研究におけるもう一つの焦点は、タリーカの勢力図と、各々の内部構造についての考察である。これまでタリーカの指導者の政治、経済活動、あるいは教義や儀礼についてはある程度研究されてきたが、複数のタリーカ間あるいは一タリーカ内の分派間の関係や内部組織、人的構造についてはまったく明らかにされてこなかった。しかし、タリーカの内部で受け継がれた上述のような諸史料を丹念に検討することで、彼らの活動範囲や内部構造が浮かび上がるはずである。

具体的には、2 年間の本研究では、1)既に収集したマルギランの「トラ」と呼ばれるマフドゥームザーダ一族に関する多類型の史料群の研究を、写真、テキストとともに出版し、一タリーカの内部構造を解明し、2)現地調査に関しては、特にロシア帝国併合（1876 年）直後のフェルガナ盆地でロシア帝国当局が動向を注視していたタリーカの有力な指導者たちに関する史料の収集と研究に的を絞る。このようにして、各々のタリーカの分派の活動を詳細に明らかにした上で、それらを総合的に分析して、当該地域におけるタリーカの存在意義を明確に示すことを目指す。

３．研究の方法

(1)中央アジア各地における現地マザール調査

私は、これまでの現地調査の経験から、旧ソ連中央アジア各地における主要なマザールを起点として口承情報や民間所蔵史料を収集する方法を習得してきた。既知の年代記や聖者伝等に登場するタリーカの指導者は、多くの場合、その埋葬場所が史料中に明らかにされている。そして、それらのうちのかなりの部分は現存しており、現在もなお、多くの参拝者を集めるマザールであることが多い。また、これらのマザールの現在の管理人は、被葬者の子孫である可能性が高い。

本研究の現地調査では、フェルガナ盆地においてロシア帝国の併合に際し、東トルキスタンにイスラーム国家の樹立を目指して挙兵した「カシュガル・ホージャ家」の末裔、ハキーム・ハーン・トラや、あるいは同じころロシア軍に対し「聖戦」を主導したマルギランの「トラ」と呼ばれるタリーカの指導者一族に属するワリー・ハーン・トラのマザールを起点に子孫など関係者を訪ねる。そして彼らからマザールの歴史、被葬者に関する伝承について聞き取りを行う。対象とする時代が比較的最近であるため、歴史研究上有意義な伝承を得られる可能性が高い。彼らは歴史史料の示す「史実」に疎い場合もあるが、その場合でも、現在に至るまで語り継がれてきた何らかの口承伝承は、地域社会における当該マザールと被葬者の子孫一族の位置を考える上で意義深く、それ自体が分析の対象となるであろう。

なお、フェルガナ盆地は現在では、ウズベキスタン、タジキスタン、クルグズスタンの 3 カ国に分断されている。このうち、上述の指導者の活動の拠点であったコーカンドとマルギランのほか、ナマンガンやアンディジャンなどの主要都市を領域に含むウズベキスタンが調査の中心となるが、オシュ（クルグズスタン）、フジャンド（タジキスタン）においても、調査の必要性は高い。

(2)史料収集

上述のマザール調査の大きな目的は、子孫等によって所蔵されている史料の収集である。マザールの被葬者の子孫たちは、自身の血統を示す系譜書や、教団の免許状、ハーン国君主たちから発行された管理人任命書や免税証書など、自らの権利、権威を証明する史料を所蔵していることが多い。このような史料は由来が明らかである上、多類型の史料がまとまって所蔵されており、またタリーカの内部資料であるという点で極めて史料価値が高い。現地調査では、このような学界に未知の史料の発見につとめる。

本研究においては、各国の研究機関に所蔵される聖者伝や文書の収集にも力を入れる。これまでの調査により、ロシア帝国併合期に東トルキスタンに挙兵した上述のハキーム・ハーン・トラに関して、ウズベキスタン歴史文書館のロシア帝国フェルガナ州のフ

ォンドに所蔵される行政文書が収集されている。しかし、調査は不十分であり、トルキスタン総督府のフォンドにも対応する文書が多数存在することが見込まれる。このフォンドの文書を調査し、収集する。また、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部には未だ十分に検討されていない聖者伝等が所蔵されているため、それらを複写し分析の対象とする。

(3)史料の分析

民間所蔵史料は上述のように歴史研究上非常に価値の高い史料であるが、既知の年代記や聖者伝と比較検討され、厳密な史料批判を経てはじめてその真価を発揮できるであろう。

４．研究成果

2 年間の本研究における最大の成果は、マルギランのマフドゥームザーダ一族に関する収集史料の研究の進展である。19 世紀初頭から 20 世紀初頭にペルシア語、チャガタイ語で書かれた多類型の民間所蔵史料を、文書館所蔵の行政文書、研究機関所蔵の歴史書とともに、総合的に分析し、アメリカで行われたスーフィズムに関するシンポジウムで研究報告することができた。また、これらの文書群すべてをテキスト化して写真とともに『マルギランにおけるマフドゥームザーダ一族に関する民間所蔵史料』として出版することができた。

そして、それにもとづき、ロシア帝国併合前後のフェルガナ盆地におけるタリーカの実態を分析し、英語論文にまとめた。具体的には、本史料集に含まれる一族の系譜書、君主からの勅令、土地売買に関する証書、聖者伝と、ウズベキスタンの文書館に所蔵されるロシア帝国のフェルガナ州統治に関わる行政文書を用いて、一族の東トルキスタンからの到来とコーカンド・ハーン国政権との関係の樹立、経済的勢力の拡大過程を明らかにし、その上で、19 世紀に生きた一族の一員ワリー・ハーン・トラがハーン国末期にロシア軍に対して起こしたいわゆる「聖戦」と、ロシア当局による彼の処遇について考察した。「聖戦」は完全な失敗に終わり、コーカンド・ハーン国はロシア帝国に併合されたが、その後ロシア当局が彼をハーン家との姻戚関係を理由に免罪したことは、ロシア側が暴動の鎮静化の一方で、現地ムスリム社会の秩序の維持を重視した姿勢を表しており、その後のロシア当局の中央アジア統治を考える上でも興味深い。

一方、当初予定していた中央アジアにおける現地調査は私の健康上の事情により、いずれも実施できなかった。かわりにイランを訪れ、かつて日本で出版した中央アジアの 18-19 世紀のタリーカの動向に非常に詳しいペルシア語の歴史書『選史』の校訂本の改訂出版の準備を進めた。テヘランの出版社が出版を引き受けてくれ、近年中に出版する運びとなった。また、改訂にあたって、イランの歴史研究者たちから有益な助言を得ることができた。そして、その準備の一環として詳細な英文解題を執筆した。

このように、本研究では、長年にわたって現地で収集してきた民間所蔵史料群を出版することができ、日本の学界のみならず、現地の学界および現地社会にも、一定の貢献ができたと考える。これにより、さらに現地の研究者との意見交換が促されると期待される。

本研究により、ナクシュバンディー教団の一派であるマフドゥームザーダの活動については、かなりの程度明らかにできたと思うが、同時に、当該時期には教団の改革派であるムジャッディディーヤの急速な展開が見られたことも明らかになった。特に同派の中央アジアにおける活動に関して注目すべきは、インドから中央アジアに移住して布教活動を行った同派の一大派閥「ミヤーン」の存在である。彼らはブハラ、コーカンド両国間を往来し、双方の政権内に立場を築いていた。この一族については、年代記や文書史料に情報が散在するが、分析のためにはさらなる史料収集の必要がある。また、私はフェルガナ盆地での現地調査において、この一族の子孫とコンタクトをとることができていたが、十分な調査を実行できずにいた。

このため、今後はこの一族を主な研究対象として、これまで同様の手法で一族の政治活動や内部構造を詳細に明らかにした上で、ムジャッディディーヤの発展を総合的に検討する必要があると考える。当時の政治情勢も考慮して旧来の勢力との関係を考察すれば、中央アジアにおけるナクシュバンディー教団の変容過程をより明確に示すことができるであろう。

そうすることによって、東西トルキスタン、あるいは王朝ごとに別個に論じられがちな中央アジア史を、より包括的に、また、より多角的な視点から描き出すことが可能になると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1. Kawahara Yayoi, The Mazar of Qutayba ibn Muslim: A Study of the Oral Tradition and Historical Documents, Edmund Waite, Shinmen Yasushi and Sawada Minoru (eds.), *Muslim Saints and Mausoleums in Central*

Asia and Xinjiang, 2013, pp. 53-69, 査読無

2. Shinmen Yasushi and Kawahara Yayoi, Buzurg Khan Tora and His Mazar at the Katta Kenagas Village, Edmund Waite, Shinmen Yasushi and Sawada Minoru (eds.), *Muslim Saints and Mausoleums in Central Asia and Xinjiang*, 2013, pp. 107-125, 査読無

3. Kawahara Yayoi, The Development of the Naqshbandiyya-Mujaddidiyya in the Ferghana Valley during the 19th and Early 20th Centuries, *Journal of the History of Sufism*, 6, 2013, 掲載決定, 査読有

4. 小沼孝博・新免康・河原弥生、「国立故宮博物院所藏 1848 年コーカンド文書再考」『東北学院大学論集　歴史と文化』49 号、2013、pp. 1-24, 査読無

〔学会発表〕(計 1 件)
1. Kawahara Yayoi, Walikhan-tura's ghazat in Marghilan: A Consideration on a Makhdumzada Family in the Khanate of Khoqand, Princeton University Symposium on Sufism and Islam in Central Asia, 21 Oct. 2011, Princeton University, U.S.A.

〔図書〕(計 2 件)
1. Kawahara Yayoi and Umed Mamadsherzodshoev, *Documents from Private Archives in Right-Bank Badakhshan 1849-1944 (Facsimiles)*, TIAS: Department of Islamic Area Studies Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo, 2013, xiv+232 p.

2. Kawahara Yayoi, *Private Archives on a Makhdumzada Family in Marghilan*, TIAS: Department of Islamic Area Studies Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo, 2012, xxxii+398 p.

６．研究組織
(1)研究代表者
河原　弥生 (KAWAHARA YAYOI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員
研究者番号：90533951

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：